

滑稽本の接続詞「しかし」について

梅林 博人

1. はじめに

滑稽本には、逆接の接続助詞と併用される「しかし」や、文意から逆接用法のように見える「しかし」が存在する。これらは、一見すると近代の逆接の「しかし」と同様の性質を備えているようにも見えるが、しかしこれらは、近世の付加用法とでも言うべき用法の一環と考えられる。本稿ではこの点を、用例と使用実態を見ながら論述する。

なお、「しかし」の「逆接」については、森田(1980)、岩澤(1985)、加藤(2001)などでその内容の多様性について指摘されているが¹⁾、ここでは、「先行の事柄に対し、後行の事柄が反対、対立の関係にあることを示す(逆接)」（『日本国語大辞典(第二版)』小学館、以下『日国』）という解釈に従う。

また、本稿では、「しかし」は副詞ではなく接続詞を指すこと、引例に際しては使用資料の表記にしたがったこと、長い用例については差し支えない部分を「(略)」としたことを断っておく。

2. 問題点の整理

2.1 先行研究の言及と用例

「しかしながら」の「ながら」が落ちて近世に発生したとされる「しかし」は、当初、「論理的な逆接条件を表すというよ

り、前述の事柄に別のあらたな事柄を付加する、または意見をさしはさむ」（森田(1968)四章）といった、言わば付加用法とでも言うべき用法であったが、近代になると逆接性を具備するようになる。その点を森田(1980)は次のように詳述する。

明治以降、「しかし」が逆接の接続助詞「～が／～けれども」などと一緒に用いられるようになる。二葉亭四迷の作品にも、／「それは課長の方が、或は不条理かも知れぬが、しかし^{いやく}苟も長官たる者に向って、抵抗を試みるなどといふなア、馬鹿の骨頂だ」（『浮雲』）「私の為を思っていふのは解^とつてゐるけれど、しかし私は如何^{どう}しても矢張東京へ出て何処かの学校へ入りたい」（『平凡』）／と例がすでに見えている。今日では、このような逆接の接続助詞と併用するのは当たり前となったが、併用することによってかなり論理的な意味関係が生み出され、²⁾それにもかかわらず、³⁾と言い換えのきく条件接続となる。「しかし」がこのような論理性を具備するに至ったのは、おそらく明治以降特に盛んになった翻訳文による西歐語接続詞の影響によるものであろう。現代のように、文体の別なく会話にも文章にも「しかし」が

愛用されるようになったのは、さらに時代がくだってからと思われる。(p.190)

この説明にしたがえば、翻訳文や西欧語接続詞に精通した二葉亭四迷が用いた次の「しかし」は、まさに逆接性を備えているということになるだろう。会話文、地の文、実用文で逆接の接続助詞と一緒に用いられた各例は、意味的にも前件と後件の間で反対・対立の関係を見ることができる。

(1)「面白く無いけれどもシカシ^{いくら}幾程云ツても仕様が無いサ(『浮雲』第二篇第九回 『新日本古典文学大系明治編18坪内逍遙 二葉亭四迷集』2002年、岩波書店 p.341)

(2) 互に瞞着^{たがひ}しよう^{まんちやく}と力めあふものゝ、しかし、双方^{つと}共力は牛角^{つと}のしたゝかものゆゑ、優^よもせず、劣^{おと}りもせず、(略) (『浮雲』第三篇第十九回 p.442)

(3) といふすら讀者のうちに其様な不良な者があると假定したとて立腹されはすまいかと危ぶまれるが、シカシ^{いくら}家族に不具者は附き物だと俚諺にも云ふから、そこは大眼に御覽を願ふ(露 ドプロリウボフ著 長谷川辰之助意譯「特別寄書 文學の本色及び平民と文學との關係」『国民之友』第四九号、明治22年、民友社)

そして、こうした逆接の接続助詞と併用される用例が『浮雲』以降の文学作品から引き続き見出されることから(京極・松井(1973)、京極(1998)、梅林(2015))、今日では、「しかし」の逆接性の具備は、近代以降と考えられるようになっている。

2.2 滑稽本の用例—論点の整理—

しかしそのいっぽうで、研究の進む今日では、近世の滑稽本について、次の①②の内容が明らかになっている。

①森田(1980)では、「しかし」が逆接性を具備するようになった契機として逆接の接続助詞と併用された「しかし」が掲げられていたが、滑稽本にも同類の「……が+しかし」という形式が少数ながら存在する(京極・松井(1973)、但馬(2007)、梅林(2015))。

②逆接の接続助詞と併用されてはいないが、文意から逆接的に見える「しかし」が存在する(但馬(2007))。

こうしたことから、「しかし」はすでに滑稽本の段階で逆接性を具備し始めていたのではないか、すなわち、滑稽本の「……が+しかし」において、森田(1980)の述べるような逆接性の具備が起こっており、その反映として②のような表現も出てきたのではないかという推論も可能なように見える。

しかしながら、作品ごとの用例数、併用される逆接の接続助詞の種類、地の文での使用の有無などの観点から検討すると、同じく逆接の接続助詞と併用される場合であっても、滑稽本の「しかし」と『浮雲』の「しかし」とでは相違があり、両者が同質同等とは考えにくい。それゆえ、近代の「しかし」に対して起こった逆接性の具備という現象が、滑稽本の「しかし」にも起こっていたとは考えにくい。換言すれば、滑稽本の「……が+しかし」が逆接性の具備に至る段階にあったとは考えにくい。したがって、滑稽本の逆接用法のように見える「しかし」については、逆接性の具備と関連させて見るより

も、近世の付加用法の一環と見るほうが妥当と考えられる。

本稿ではこうした内容を以下の手順で述べてみたい。まず、滑稽本各作品の使用実態と用例を見ながら、滑稽本の一部の「しかし」が逆接用法のように見えることを確認する。そのうえで、先学が近世の用例を逆接と見なさなかった²⁾点を考慮して、滑稽本の「しかし」と近代の「しかし」との異同を考える。そして、滑稽本の逆接用法のように見える「しかし」は付加用法の偶発と考えることが妥当という結論を述べる³⁾。

3. 調査について

今回は次の資料を使用し、通読と機械検索(国文学研究資料館の「電子資料館」)を併用して調査を行った。挙例の際に示すページ数も以下の資料のものである。

○十返舎一九『東海道中膝栗毛』(『日本古典文学大系62 東海道中膝栗毛』1958年、岩波書店)

○式亭三馬『浮世風呂』(『新日本古典文学大系86 浮世風呂 戯場粋言幕の外 大千世界楽屋探』1989年、岩波書店)

○式亭三馬『四十八癖』(『新潮日本古典集成 浮世床 四十八癖』1982年、新潮社)

○式亭三馬『浮世床』(『新編日本古典文学全集80 洒落本 滑稽本 人情本』2004年、小学館)

以上による調査結果を「表1 滑稽本における接続詞「しかし」の使用実態」としてページをあらためて示す。

4. 逆接的に見える用例の確認

4.1 形式から逆接的に見える用例

まず、逆接の接続助詞(または接続詞)と併用されていて形式面から逆接用法に見える「しかし」の用例を見る。接続助詞「が」との併用5例、接続詞「が」との併用1例、合計156例中6例(3.8%)である。以下に全例を挙げる。

(4) 弥次「ハア成程^{なるほど}そふおつしやればきこへましたが、しかしそれはおめへさまのほうの得手勝手^{かたづけ}、(『東海道中膝栗毛』發端p.31。前件「きこへました」(了解)と後件「得手勝手」(反論)で対立的)

(5) 弥次「(略)どふぞ腹^{はら}の子ぐるめに、金拾五兩^{かたづけ}つけて片付たいと、わしがたのまれて居るから調度よいが、しかし女房のある上へはどふもと、はなしにつみ、おれもその拾五兩ほしい最中、(『東海道中膝栗毛』發端p.34。前件「たのまれて居るから調度よい」(紹介できる)と後件「女房のある上へはどうもと」(躊躇)で対立的)

(6) ●(略)サア又爺^{おほごと}さまの耳へ這入たら大事だが、併元日^{しかし}しまから這入所もあるめへ。追付^{おつつけ}帰るだらうとおもつて、待^{まで}どくらせどサア^{けへ}帰るもんぢやアねへ。(『浮世風呂』三編巻下p.200。前件「(使いが帰らぬことが)爺さまの耳へ這入たら大事だ」と後件「追付帰るだらう(大事になるまい)」で対立的)

(7) 「(略)そのときはその時だけに工夫がつくだらうが、シカシ今^{くふう}がかんじんだ。(『四十八癖』初編p.215。前件「そのとき」と後件「今」で対立的)

(8) 徳「さういはれては論^{ろん}なしたが、しかし足^そ下もおれが異見^{いけん}について、ちつと

表1 滑稽本における接続詞「しかし」の使用実態

表現形式	作品	東海道中	浮世風呂	四十八癖	浮世床
		1802-1814年 共和2-文化11	1809-1813年 文化6-文化10	1812-1818年 文化9-文政1	1813-1823年 文化10-文政6
(A) 文と文をつなぐ					
文頭	(…) しかし	1(55)	0(32)	0(37)	0(22)
文中	「体言、しかし」	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	「連体形、しかし」	0(0)	0(0)	0(1)	0(0)
	「連用形、しかし」	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	「…が、しかし」	0(2)	0(1)	0(1)	0(1)
	「…けれども、しかし」	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	「…ものの、しかし」	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
	「接続詞、しかし」	0(0)	0(0)	0(1)	0(0)
	「感動詞、しかし」	0(0)	0(0)	0(1)	0(0)
	後件へ挟み入れる	0(0)	0(0)	0(1)	0(0)
その他	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	
(B) 語や文節をつなぐ		0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計		1(57)	0(33)	0(42)	0(23)

【表1の注】

* 数字は実数。「地の文(会話文)」と示す。例えば『東海道中膝栗毛』の計欄は、地の文1例、会話文57例、合計58例となる。左欄の表現形式の分類項目は京極・松井(1973) pp.132～135を参考にした。

* 「文頭」は、文頭もしくは複文における後続句の句頭。

* 「連体形、しかし」は「連体形+助詞、しかし」も含む。

* 「連用形、しかし」は「テ形、しかし」も含む。

* 「…が」「…けれども」「…ものの」は接続助詞。「…けれども」は「…けれど」等の異形を含む。

* 「しかし」に前接するリーダーやダッシュは読点扱いとした。

* 「後件へ挟み入れる」の用例は、「是もしかし高さうな物だ」(『四十八癖』p.350)である。

は物まなびをしなせへ(『浮世床』初編中p.277。前件「論なし」と後件「物まなびをしなせへ(反論)」で対立的)

(9) ▲(略) 俺阿慮力迦娑婆訶をいふ間には、宿へ帰つて熱爛でキウツと引かけたからう。ガしかし、こゝえた腹へ急に熱い物は^{だいどく}大毒、そこが気の毒でござず、(『四十八癖』三編p.289。接続詞

「が」との併用。前件「熱爛」と後件「熱い物は^{だいどく}大毒」で対立的)

4.2 文意から逆接的に見える用例

次いで、文意から逆接的に見える「しかし」を見る(4.1で挙げた例は除く)。我田引水の解釈が心配されるため、できる限り付加用法での解釈を心がけたが、その

中にあっても、『東海道中膝栗毛』58例中の11例、『浮世風呂』33例中の4例、『四十八癖』42例中の7例、『浮世床』23例中の1例、合計156例中の23例(14.7%)の用例については、前件と後件の間に反対・対立の関係を見ることも可能であるように見える。以下に用例の一部を挙げる⁴⁾。

(10) 犬市「モシ川はひざきりもござりませすかな 北八「さやう\。しかし水が早いから、おめへがたアあぶない。用心してわたりなせへ(『東海道中膝栗毛』三編下p.157。前件「さやう」(=川はひざきりで浅く安全)と言いつつ後件で「水が早いから、(座頭の)おめへがたアあぶない」と対立的に言う)

(11) 弥次郎「ほんにわらじのきれるは、あるき下手でござりますが、あなたは道がお功者なことだ。しかし私も、此わらじは、一昨年松前へはいてまいつたが、歸るまで何ともござりませなんだから、しまつておいて、去年長崎へもはいてまいるし、そして又今度はいて出ましたが、御ろうじませ。まだなんともござりませぬ(『東海道中膝栗毛』四編上p.188。前件「あなたは道がお功者」と後件「私も」で対立的)

(12) いしや「(略)エ、鶏卵はよろしくない。しかしたべたいと思はゞ、あひる卵を少しが能い(『浮世風呂』前編卷之上p.26。前件「よろしくない」と後件「能い」で対立的)

(13) べか「あれを下に遣て挿込みのある簪と取替たがの。二朱と六百いくらか足たはな。余程な損をしたよ さる「そりやアおめへ些とは損をせざらにさ べか「しかし流行だから能のう(『浮世風呂』三編卷之上p.171。前件

「損」と後件「能」で対立的)

(14) 「(略)おれが嫌へなものはかみがた狂言と蛇と潮来だ。しかしさういへねへよ。今ぢやア、かみがた風が江戸へ流行つて、みぢつかな羽織を着る所為か、生姜な江戸つ子が多くてうるせへ。(『四十八癖』初編p.210。前件で「嫌へなものは」と挙げつつ後件で「さういへねへ」と打ち消して対立的)

(15) ▲そりやアさうさ。小口でもきいて、肌合な男なら、銭がなくなつても能いはな。●誰が気も違はねへもんだの。▲しかし違ふもあるよ。石部金吉金兜という男を好く者もあるはな。(『四十八癖』二編p.277。前件「違はねへ」と後件「違ふもある」で対立的)

(16) けん「引ぬきで鳥になると、女房は家鴨の精霊だらう せい「独吟のげんぢよ節で所作をお助踊で見てへ けん「しかし家鴨と迄もいくめへ。薩摩芋の精霊さ(『浮世床』初編中p.280。前件で「家鴨」と言いつつ後件で「家鴨と迄もいくめへ」と打ち消して対立的)

5. 逆接用法に見える「しかし」の解釈

5.1 孤例的な「……が+しかし」

では、これまで見てきた滑稽本の「しかし」について考察をしてみたい。

例(4)～(16)は、いずれも逆接用法のように見え、とりわけ、逆接の接続助詞と併用された「……が+しかし」においてはその傾向が強い。用例のなかには、次のように出典を隠して並べてみると、『浮雲』の用例か滑稽本の用例か見分けがつきにくいものもある。

(17) そのときはその時だけに工夫が

くだらうが、シカシ今がかんじんだ。
(18) 面白く無いけれどもシカシ幾程云
つても仕様が無いサ
(例17 = 7、例18 = 1)

そのため、『浮雲』の用例に逆接性の具備を見るならば滑稽本の用例にも同様の解釈を施したくなるのは自然である。

しかし、そのような解釈は、滑稽本の「……が+しかし」が各作品においてほぼ孤例であることを知ると(表1参照)、飛躍した解釈であることが分かる。

森田(1980)では、「しかし」における逆接性の具備について、「今日では、このような逆接の接続助詞と併用するのは当り前となったが、併用することによってかなり論理的な意味関係が生み出されると指摘されていたが、この指摘を読み解くと、論理的な意味関係が生み出されるほど頻繁に、逆接の接続助詞と併用するしないはそういう用例と接触することが、逆接性の具備には必要である」ということになる。

そうなると、滑稽本の「……が+しかし」は、逆接の具備には至らなかったと考えられる。読み手の立場になって考えてみても、作品に一、二度しか現れない滑稽本の「……が+しかし」を、馴染みのある付加用法ではなく新奇な(あるいは未知の)逆接用法で読むことは常識的には考えにくい。

以上から、滑稽本の「……が+しかし」が逆接性の具備の契機になったとは考えにくいと結論づけてみたが、しかし、こうした考察は、逆接用法のように見えるというその状況を重視する立場からはもどかしいに相違ない。そこで次節では、併用される逆接の接続助詞が近世におい

ては限定的であるという点に注目して、さらに論述を重ねてみたい。

5.2 併用される逆接の接続助詞の種類

「しかし」と併用される逆接の接続助詞の種類については、京極・松井(1973)が次のように述べている。

『東海道中膝栗毛』の発端には、／成程そふおつしやればきこへましたが、しかしそれはおめへさまのほうの得手勝手／という(A)②の用法が現われる。『浮世風呂』『浮世床』にも見られるが、いずれも「……が、しかし……」である。明治以降になると、「が」だけでなく種々の逆接の助詞のあとに置く例が現われる。(p.133、波線引用者。明治以降の『浮雲』『腕くらべ』『蓼喰ふ虫』の「……けれども／もの／ながら／けれど+しかし」の用例は割愛)

併用される逆接の接続助詞が、近世では限定的で「……が」に限られるのに対し、近代ではそれが多種となることを述べており、形式面に関する指摘として重視すべきである。

今回の調査では、逆接の接続助詞との併用例は、この言及で挙げられているものも含めて5例見つけたが、いずれも「……が+しかし」であった。いっぽう、近代の『多情多恨』(尾崎紅葉)には「……けれども+しかし」2例が存在することを確認している(梅林(2015))⁵⁾。

このように、近世と近代では「しかし」と併用される逆接の接続助詞の種類に違いが認められる。多種類の逆接の接続助詞と結びついている近代の「しかし」について逆接性を具備しているという説明

をするならば、「……が」のみとしか結合しない、しかも、先述のようにその用例数も孤例的に少ない滑稽本の「……が+しかし」には、逆接性の具備という説明は控えるべきだと考える。

5.3 論理的な意味を生じやすい環境か否か

最後にもう一点、森田(1980)の「併用することによってかなり論理的な意味関係が生み出され」という指摘を踏まえて、使用がほぼ会話文に限られている滑稽本の「……が+しかし」が、論理的な意味関係を生み出しやすい環境にあるのか否かを考えてみたい。

ここまで逆接用法のように見える用例ばかりを見てきたが、観点を変えてみると、じつは滑稽本の「しかし」の127例(全156例の81.4%)は、次に代表されるような非逆接的な付加用法である。

(19) 奥より女房出来り「ヲヤ、お滝さん、(略)御乳母どん、上んなナ。ナニカ、御新造さんは芝居か うば「アイけふはふきや町さ 女房「宗十郎が御鼠貞だの うば「なんといふ事はねへ。気が多いから、とき／＼ひいきが替りやす 短「情なしな御新造だの びん「役者で済だもんだ。御亭主が其通りぢやア大事だ 女房「しかしお羨い事たぞ。代りめ／＼に幾度も御覧じて(『浮世床』初編下p.303)

例(19)は鼠貞の役者を度々変える御新造を話題とする文脈で用いられている付加用法の「しかし」であるが、岩澤(1985)の「転換」に該当するとともに目され、「逆接関係もなく話題が少し転換した時」(岩澤同論文)に使われるという特徴も

見ることができる。

そして、滑稽本の「しかし」は、ほとんど会話文で使用されるという顕著な傾向にあることが表1より見て取れるから(合計156例中、地の文は『東海道中膝栗毛』p.209の1例のみ)⁶⁾、こうした非逆接的な「しかし」は、これまで見てきた逆接用法のように見える「……が+しかし」と、会話文という一つの表現の場で同居することになる(以下図1参照)。

いっぽう、地の文と会話文の双方で「しかし」が用いられる『浮雲』で考えてみると、会話文での「しかし」の同居状況は滑稽本と近似しているが、地の文では、話しことば独自の用法とも言われる例(19)のような用例は一例と目立たなくなるから⁷⁾、非逆接的な「しかし」と逆接的な「しかし」の同居状況が、会話文の場合とはやや異なってくる(以下図2参照)。

以上を図1、2としてまとめたうえで、今、作品の読み手という立場になって考えてみたい。

読み手は、地の文と向き合う時は、目立たなくなっている非逆接的な「しかし」を目にする機会が減るため、結果的に逆接用法の「……が+しかし」を、非逆接的な意味の干渉を受けにくい状態で見ることができるようになる(図2の地の文)。したがって、「しかし」の前後に反対・対立の関係を見る機会も増えることになる。比喩的に言えば、非逆接的な意味に煩わされることなく、逆接用法の「……が+しかし」に向き合うことができるといことである。

そして、作品によって地の文が長くなり、その箇所も多くなれば、関係を見る

図1 滑稽本の「しかし」

会話文	逆接用法のように見える 「……がしかし」 非逆接的な「しかし」
-----	---------------------------------------

図2 『浮雲』の「しかし」

会話文	逆接用法の「……がしかし」 非逆接的な「しかし」
地の文	逆接用法の「……がしかし」 (非逆接的な「しかし」は目立たず)

機会も比例的に増えることになる。たとえば一節すべてが地の文ならば、非逆接的な意味の干渉を受けにくい環境のもとで「……がしかし」を見ることが多くなり、結果、前後件の反対・対立の関係を見る機会も多くなると考えられる。

換言すれば、非逆接的な意味の干渉が少ない地の文で「……がしかし」に接触する機会が増えれば、「しかし」を逆接的と見る傾向が高まり、結果的に「しかし」の論理的な意味の生成に影響が及ぶのではなからうかということである。もちろん、読み手において、そのような接触と反応が実際どの程度起こるのかは定かではないが、ただ、地の文で「……がしかし」を読むということには、そうした可能性が含まれているのではないだろうか。

そのように考えたうえで再び滑稽本に眼を向けると、そこには地の文での使用はなく、会話文で用いられる「……がしかし」が少数例あるということになるのであるが、こうした滑稽本の表現環境においては、「……がしかし」が論理的な意味関係を生み出しやすいとは言い難い。

総じてみれば、「しかし」の表現の場と

して「地の文」を有する『浮雲』のほうが論理的な意味関係を生じやすい環境にあると考えられ、それに対して滑稽本はそのような環境にあるとは言えず、結果的に、滑稽本の「しかし」には逆接性の具備が生じにくいのではないかと考えるのである。

6. 付加用法における偶発

以上の考察から、滑稽本の「……がしかし」は逆接用法ではなく、付加用法における偶発的表現と見なすべきである。そしてそれにとまって、文意から逆接的に見える滑稽本の「しかし」も、付加用法の一環と見なすことになる。

つまり、本稿4章で各用例に記した反対・対立的な意味は付加用法のものであり、前述の事柄に新たに付加した事柄が、結果的に反対・対立的な内容であったということになる。

こうした、一見逆接用法的に見える「しかし」をどう解釈すべきかについては、多門(1990)に次のような提唱がある。

調査例文「(一部略引用者)彼女は美人だった。しかし、性格が悪かった。」も大話題(「彼女」)の中の小話題変えと考えることができる。そして、この場合の逆接とは、小話題同士が、なんらかの評価の上で対立しているからであると考えられることもできる。(IX章)

話題変えの、ある特別の場合が典型的「逆接」となるというような説明を今後目指すべきではないか⁸⁾と考えられる。(注(6))

ここで言う「話題変え」は、「前述の事柄に別のあらたな事柄を付加する、また

は意見をさしはさむ」(森田(1968)四章)という、本稿で付加用法と称したものと一致する。多門(1990)の考察は現代語の談話の「しかし」を対象とするものであるが、滑稽本の「しかし」がほぼ会話用語であったことを考えると、その理論は本稿にも援用しうる。

こうした先学の談話理論も、滑稽本の「しかし」を付加用法と見なす根拠の一つとしたい。

7. おわりに

本稿では、実例を見ながら滑稽本の「しかし」について検討を行い、一見逆接用法のように見える「しかし」であっても、それはやはり近世の付加用法の一環であり、そこに見える逆接性も偶発によるもので、近代の「しかし」に見える逆接性と同様に見るべきではないことを、複数の観点からの考察によって論述をした。

今後、調査資料を拡げてさらに考察を継続したい。

注

- 1) たとえば岩澤(1985)は、「逆接」と言われるものの中には対比、展開、転換、補足などの用法があると指摘する。
- 2) 森田(1980)が先の引用で「明治以降」とするほか、湯澤(1936)は、江戸語の接続詞を挙げる中で「しかし」と「しかしながら」を併記するが、次のように「しかしながら」にのみ逆接の意味の注記をし、「しかし」には何も記していない。「【しかし】用例割愛」「【しかしながら】」「【けれども】」「【だが】などの意」用例割愛」p.246。
- 3) 今回対象を滑稽本に限るのは、既述

のように、問題となる用例がそこにあると先行研究によって明らかになっているからであるが、湯澤(1936)、湯澤(1957)、森田(1968)、青木(1973)、京極・松井(1973)、荻野(2001)、『日国』などから、近世諸資料に「しかし」が存在することは明らかであり、また、人情本、洒落本、紀行文をはじめとする諸資料の調査はもとより有効と考える。京極・松井(1973)ではそれらを含めた多資料が調査されているが、使用実態など不明な点もあることから、調査の機会を別途考えたい。

- 4) 本文に非掲示の用例の所在を記す。『東海道中膝栗毛』p.28、43、200、251、314、348、363、471、478。『浮世風呂』p.228 後者、258。『四十八癖』p.194、197、230、274、289。『浮世床』挙例の一例のみ。
- 5) 近代の小説では、併用される逆接の接続助詞の種類が増えてくることから、こうした現象を「しかし」の逆接性の具備の過渡期の現象と捉え、逆接の接続助詞の種類とその数(用例数)を過渡的指標とすることも一案である。
- 6) 会話文に偏るという指摘に関して、滑稽本が会話文主体の資料であるからそれは当然であるという声は傾聴に値する。ただ、資料には少ないながら地の文も存在するし、そこには一例ながら用例も存在した。また、表1の「0」は多少ではなく有無を表していることなども考えると、会話文に偏ることを指摘することは意味があると考えられる。
- 7) 多門(1992)は、この種の「しかし」を「話題変えマーカ」として、「書きことばには見られない、話しことば独自の

「しかし」の用法として、しばしば指摘される」と紹介しつつ、「実は書きことばの中にも〈話題変え〉の働きがあるものの存在が指摘されている」として例外的存在についても考慮している。『浮雲』の一例は以下である。さては老朽しても流石はまだ職に堪へるものかしかし日本服でも勤められるお手軽なお身の上(第一篇第一回p.203)

8) 加藤(2001)にその様子が見られる。

参考文献

- 青木伶子(1973)〈資料1〉「接続詞および接続詞的語彙一覧」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』明治書院
- 岩澤治美(1985)「逆接の接続詞の用法」『日本語教育』56号 日本語教育学会
- 梅林博人(2015)「明治における接続詞「しかし」の用法について」中山緑朗編『日本語史の研究と資料』明治書院
- 荻野千砂子(2001)「近世期の接続詞の展開—版本狂言記を中心として—」迫野虔徳編『筑紫語学論叢 奥村三雄博士追悼記念論文集』風間書房
- 加藤重広(2001)「照応現象としてみた逆接—「しかし」の用法を中心に—」『富山大学人文学部紀要』34
- 京極興一・松井栄一(1973)「接続詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹編『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』明治書院
- 京極興一(1998)「接続詞「が」の発達と用法—近代小説を中心として—」『近代日本語の研究—表記と表現—』東宛社(初出1977年「接続詞「が」—その発達と用法をめぐって」『国語学と国語史』松村明教授還暦記念会)
- 但馬貴則(2007)「十九世紀前半の「しかし」の用例について—おもに江戸の口語的資料を対象として—」『大阪産業大学論集.人文・社会科学編』1 大阪産業大学学会
- 多門靖容(1990)「接続詞と談話展開についての—視点」『人間文化(愛知学院大学人間文化研究所紀要)』第5号 愛知学院大学
- 多門靖容(1992)「文章の談話分析—「しかし」前後件の後続展開調査—」『日本語学』第11巻第4号 明治書院
- 森田良行(1968)「しかし—発生と展開」『ことばの宇宙』3巻11号 テック(森田(1993)に所収、後者使用)
- 森田良行(1980)「しかし」『基礎日本語2』角川書店
- 森田良行(1993)『言語活動と文章論』明治書院
- 湯澤幸吉郎(1936)『徳川時代言語の研究』刀江書院(再版 風間書房1955)
- 湯澤幸吉郎(1957)『増訂 江戸言葉の研究』明治書院

付記

本稿は第139回表現学会東京例会(平成28年10月22日於共立女子大学)での口頭発表「接続詞「しかし」の逆接性をめぐって—滑稽本と『浮雲』を中心に—」の内容を修正したものである。例会の御出席者及び編集委員会から貴重なご指摘をいただいた。記してお礼申し上げます。本研究はJSPS科研費JPI6K02751「近代の新語・新用法及び言語規範意識の研究」の助成を受けたものである。

(相模女子大学)